日本女子体育大学

# Dance Letter

Vol.37

http://www.jwcpe.ac.jp/

Vol.37
# Dance Letter

## 3年生パフォーマンス

### 荒澤 来瞳（4年）　坂本研究室

研究室授業を開始して約2ケ月過ぎた頃から3パフォに向けて題材を考え始めました。なかなか全員が揃うことが少なく振りを写すことができなかったり、私自身も具体的なイメージを膨らませることができず、思うように作品が進まない時もありました。中間発表では、舞踊学の先生方からの良い評価と同時に厳しい意見もたくさん頂き、振付者という立場の私が仲間にどう伝えたら良いのか考えながら練習に取り組みました。創作者の立場で作品と関わってきたので、いざ作品に入って踊ろうとすると、今までたくさん踊ってきてイメージや雰囲気を徐々に掴んでいる仲間との差を埋めるのがとても難しかったです。今回創作した「雨夜の月」は冷たく輝く月に霧がかかる様子や、その隙間から光が差し込む幻想的な情景を表現しました。群舞作品は気持ちやイメージが特に大切で、気持ちが揃わないとまとまりの無い作品になってしまうのだと実感しました。本番は今まで踊ってきた中で一番互いを感じ合うことができ、この作品を坂本研究室の仲間と踊ることができて良かったと思います。そんな経験ができたのも、支えてくださった坂本先生やスタッフの方、たくさんの支えがあったからだと思います。その感謝の気持ちを忘れずに、次は卒業公演に向けて気持ちを新たに頑張りたいと思います。

### 上田 采和（4年）　高野研究室

2017Bの高野研究室は個性の塊です。各々の性格や考え方、些細な動き１つ取っても誰とも被ることのない強烈な個性を生かして創り上げた作品となりました。「MRI」をテーマに創作したのですが、MRIを追究していく過程で、2つの視点を持つことができました。

1つは、MRIにスキャンされている間に起こっている身体の内側の様子、もう1つは、患者がスキャン中に感じる不安との葛藤や感覚的な外側の様子、この2つの様子を2チームに分かれて表現しようと創作を始めました。創作過程では全員の見解が一致せず、蟠（わだかま）りを抱えて悩み、打開策が見つからず停滞する日々が続きました。しかしメンバー内で話し合ったことで、お互いの良い部分を組み合わせながら、作品が盛り上がる展開へと辿り着くことができました。

創作過程の長さ苦しさに比べると、本番は一瞬の解放でした。その一瞬の中で感じたものは各々違うかもしれませんが、ここまでの葛藤ですら、光り輝いてみえました。

ダンサーにとって舞台とは、言葉で表現することができないほど限りなく大きな力があり、必要不可欠なものだと思います。その舞台の集大成ともいえる卒業公演では、2017Bの高野研究室らしく、先生＋20人の仲間で一緒に研究活動を行っていきたいです。

## 平 菜月（4年）　松山研究室

「今年の松山研究室のメンバーはこの3人です」そう告げられてから約7ヶ月後に3年生パフォーマンスの舞台に上がった。史上最小人数の私たち。研究室のメンバーがまさか3人になるなんて思いもしなかった。ましてや結局2人であの舞台に上がる事になるなんて、誰もが予想をしていなかったであろう。大人数で舞い、舞台の上でキラキラ輝く先輩方の姿を見ていた私たちは、3年生パフォーマンスの作品を作っていく中で、想像を遥かに超える困難等、大きな壁にぶつかった。ほかの研究室とはまた違う、複雑な壁であったと思う。そのため、私たち2人は恐らく周りの同級生とは違った思いで舞台に立つことになった。そんな中で私たち2人が演じたのは、美しさと醜さは表裏一体。鏡に映った自分の姿は、姿形は同じなのに考え方や気持ち次第で美しくも醜くもなる。美への執着に苦しみ1人もがく女達の像。というテーマの元で作った、「mi月Rorrr。～美醜の像～」という作品。急遽2人になってからは、この作品を何度も改良した。ビデオを撮っては2人で確認をして…を繰り返した後に完成したこの作品。時に苦しみ、時に涙を流し。時に他の研究室を羨んだ。そんな中でも、お客様から拍手を貰えるまで支えて下さった先生方や助手さん、家族、最後までパートナーとして踊ってくれた吉田には感謝の気持ちしかない。そして、この作品には今までにない程の思いが込められていると思う。

## 中村 玲音（4年）　石川研究室

私たち石川研究室は『Make Me Feel』というタイトルで、５つのセクションに分かれそれぞれジャンルの違ったジャズダンス作品を創作しました。

石川研究室は総勢24名が所属しており、それぞれの経験も様々です。今回は未経験のジャンルに挑戦するメンバーも多数いましたが、経験者にコツを聞いたりアドバイスしてもらったりとメンバー間でできる限り助け合いました。作品づくりは振付者が中心となって進めましたが、「全員でこの作品をよりよくしていこう」という姿勢が見られました。

ジャズダンスは、ダンスにあまり馴染みのない人でも親しみやすいジャンルですが、ありきたりにならないよう今まで学んだ技術や表現力を駆使して作品づくりに臨みました。かといって奇を衒（てら）ったものにならないよう、観客の皆様に存分に楽しんでもらえるようにエンターテインメント性を重視しました。そして本番当日、観客の皆様が私たちと一緒に盛り上がってくださるのが感じられ、演じる側と観る側が共にステージを作り上げていることを実感しました。

最後になりましたが、指導の石川先生、観てくださったお客様、スタッフの下級生、関わってくださったすべての皆様に感謝申し上げます。４年生の卒業公演に向け、石川研究室メンバー一同、さらに邁進してまいります。

**石川 みう（4年）　岩淵研究室**

今までに様々なジャンルを経験し、コンテンポラリーダンスの経歴も様々で共通点や繋がりもなかった19人。作品内容を温めると同時に、このメンバーが1つにまとまるのも沢山の時間がかかりました。作品の方向性はもちろん、深く分析していくうちに19人それぞれの意見が出ては分かれ、話し合うことも多くありました。今回私は、作品を作ることの難しさではなく、メンバー全員が作品内容を研究し、全員で作品を理解していくことの難しさを痛感しました。これはきっと全員が感じていることだと思います。

最初は2グループに分かれて作品を作る予定でした。大きい船の舵をきることは、小さい船の舵をきることよりもリスキーなことですが夏休みから1つの大きい船に乗ることを決めました。そう決めたことで方向転換は厳しく、揺らぐことも沢山ありましたが最終的にぶれなかったのは、それぞれの研究室での居方や在り方も悩み研究してきたからだと思います。メンバーの意見を尊重しつつも形にしたいものをはっきりとさせてまとまっていくことを学びましたが、更なる課題に向けて、コンテンポラリーダンスについて研究を重ね、知識を深めていく必要があると思います。3年生パフォーマンスを終え、次は卒業公演にむけて日々研究を重ねていきます。

---

**小野塚 茉央（4年）　渡辺研究室**

私たちは7月下旬からコンセプト等についてプレゼンテーションを行い、8月から作品創作を始めました。研究室として作品を創るという、メンバー誰もが初めてのことに戸惑いも多く、上手くいかないことも何度もありました。その中で今の自分たちに出来る一番を、今の自分たちにしか出来ない作品を、その一心で励んだ3ヶ月間でした。

作品名は「vague」。曖昧な、漠然とした、はっきりしないという意味を持ちます。プレゼンテーションの際に興味をもった「デジャヴ」を基に、私たちの内に流れる時間と、それは人それぞれに違うことを面白いと感じたことをキッカケに作品を創作しました。

今私たちは同じ時間の中を生きています。しかし、それぞれの内に流れる時間は違うのではないでしょうか。イマ、カコ、ミライの点が同時に発生し消失し続けること。各々の違った流れが触れるとき、その点はどのような変化を起こすのか、そしてその曖昧な線と点は私たちに何を与えるでしょうか。

もし1人でも作品を見てくださった方がこの文章を読んでくださっていたら奇跡的でステキな出会いだなと感じます。最後になりましたが、一緒に作品を創ったみんなと、先生方、スタッフの皆様、見てくださった方に感謝申し上げます。ありがとうございました。

**内藤 遥菜（3年）　舞台監督**

私は2019年3年生パフォーマンスの舞台監督を務めました。正式に舞台監督としてスタッフをすることが決まった時、本気でこの舞台に向き合う先輩方を精一杯サポートしたいという気持ちと、私含め同期と1年生による44名のスタッフのリーダーとして活動することに不安な気持ちもありました。迷ったり悩んだりすることもありましたが、同期や後輩たちのサポートや先生方の応援のおかげで無事舞台を成功させることができました。また、今まで出演者として舞台に立ってきたダンス人生でしたが、スタッフ側のお仕事を学ぶことによって普段舞台は本当に沢山のスタッフの方々の地道な努力によって支えられていることを知ることができ、スタッフの方々への感謝の気持ちや、自由にのびのびと照明を浴びて踊れることは本当に幸せなことなのだと感じるようになりました。このような貴重な体験をさせて頂ける機会があるのは、照明を教えてくださっている宇野さんと、支えてくださった助手さんや先生方のおかげです。この経験を活かし、大好きなダンスと毎日触れ合える環境に感謝し精進していきます！

## 正課活動

**杉本 麗衣（4年）　舞踊学専攻　卒論発表会**

2年前は聴衆側として、今回は発表会運営準備のお手伝いとして、今までで最も近い場所から発表を聴かせていただきました。論文のテーマは様々で、それぞれの論文に興味深さがあり、１つのことについて深く研究していた背景が強く伝わってきました。また、舞台上で聴衆に堂々と発表をする先輩方の姿はとても素晴らしかったです。

自分の素朴な疑問や興味を深く考え研究する機会は、滅多にないことだと思います。来年の卒論発表会に向けて準備を始めていますが、調べていくたびに疑問が疑問を生むことの繰り返しで中々思うように進みません。来年は自分の番だと考えると頭が痛いですが、この機会を無駄にしないように、そして歴代の先輩方のように堂々と発表することができるように、来年の自分たちの発表の舞台に向けてこれからも日々研究を続けたいと思います。

## ワークショップ

### 小野間 愛芽（3年）
### 酒井はなさんワークショップ

11月に行われた元新国立劇場ダンサーの酒井はなさんのWSに参加しました。

バーレッスンは、すべてのバレエのポジションは6番で立ったときの姿勢が基本であること、頭から足先まで意識できた状態ではじめて他のポジションに応用できることを教わりました。また、イメージするレッスンが大事でポールドブラは腕全体で空気を押すように動かす、横にタンデュするときも自分が壁に挟まれているというイメージをするなど、意識では出せない動きの質が高められることを学びました。センターではバーレッスンの応用、アレグロは特に難しく、且つ速い動きの連続で振りを覚えるにも必死でした。意識すると振りが飛んでしまったりとても苦戦しました。後半はトウシューズを履き、はなさんが当時キトリのヴァリエーションを踊った際の振りを写して頂きました。顔の付け方や魅せ方に気をつけて踊りました。テンポが速く、切り替えや足捌きの多い踊りは基礎ができた上で表現がついてくるので基礎がどれだけ重要か改めて実感しました。

私にとってとても濃い3時間でした。この経験をバレエの授業の他に部活や外部のレッスンで生かし、もっと踊りの質や表現力を高めていきたいです。この度は貴重な時間をありがとうございました。

## 部活動

### 平賀 莉乃（3年）
### ダンス・プロデュース研究部

私たちはダンス作品を発表する機会が多く、ダンサーとして振付者として成長するチャンスに恵まれています。機材WSや公演スタッフを経験できるので舞台の創り方や仕組みを学べて大きく成長もできます。レギュラー活動として「朝バレエ」や「放課後コンテ」、昼休みにみんなで和気あいあいと楽しむ「昼の憩い」、多目的ホールの大スクリーンで映画を楽しむ「映画の集い」、夜に学外で大騒ぎして楽しむ「ダンプロナイト」、どの企画も楽しいものばかりです。学外の劇場で本格的な公演を打つ「自主公演」（3月初め）や「ぴちぴちちゃぷちゃぷらんらんらん」（5月末）がありますが、自主公は学生自らが振付制作を手掛け、ぴちぴちは毎年豪華な振付者を学外から3名招き作品を創っていただきます。世田谷区のマスコットキャラクターである「からぴょん」はダンプロが振付けてからぴょんダンスを踊り、世田谷文学館では地元の子どもとコラボレーションして烏山を盛り上げています。

残念ながら新型コロナウイルスの影響により、すべての活動・公演を中止しています。映像作品にも積極的に取り組むダンプロですから、今回あまりメディアで生かせなかったのが心残りです。しかし事態が収束したら、活動をハデに再開してはじけたいです。

### 桑原 希世美（3年）
### 舞踊部（発表会）

舞踊部です！舞踊部の大イベントは、ダンスのジャンル、そして学科を問わずたくさんの振付者が作品を発表する「舞踊部発表会」です。昨年度は、昨年8月そして今年の2月と2回行われました。8 月の発表会は4年生部員の引退公演でした。下級生にとっては4年生と踊ることができる最後の機会ということでさみしくもありましたが、何よりいつも親しくして下さったり、ダンスの楽しさをたくさん教えてくださったりと、感謝の気持ちをもって見送ることができた発表会になりました。また、今年の2月の発表会では1～3年生の振付者が多くの作品を披露しました。ダンスが大好きな部員の皆さんがパフォーマンスする表情は、本当にきらきらしていてダンスが好きという気持ちがあふれているようでした。作品には、学年もバラバラでダンス学科以外の部員も多くおり、全員で1つの作品を創り上げるため、お互いに刺激をもらうことでより仲も深まります。また、自分が踊ったことのないジャンルに挑戦したり、または初めて自分の作品を創って披露したりする部員も多く、様々な「挑戦」をすることによって新しい自分を発見、発信できる場になりました。発表会はよりダンスライフを楽しいものにするイベントです。

## 外部活動

### 古谷 美咲（3年）
### 2019年度アメリカフィラデルフィア舞踊研修旅行

アメリカ舞踊研修の話を初めて耳にしたのは私が1年生の時でした。それは当時の2年生向けに募集がかかっていたもので、参加することはできませんでした。しかしそれから、いつか自分にチャンスが巡ってきたら必ず参加しようと強く決めていました。

行く気満々だったものの私は英語が全く話せず臆病で人見知りなので、はじめは不安でいっぱいでした。しかしいざ現地に着いたらどんなに不安でも自分でどうにかするしかない。なれない英語をグーグル先生に教わりながら話したり、現地の優しい生徒さんに助けられながらなんとかコミュニケーションをとり、最終日には初日の不安が嘘かのように日本人が自分一人の中大学の授業を受けることまでできるようになりました。

U-Artsの授業は、日本でなかなか感じることのできない学生達のオープンな姿勢やパワフルな身体の使い方に生で触れることができ、非常に貴重な経験となりました。放課後は外部スタジオのレッスンを受講したりとダンス漬けの日々。夢の場所だったニューヨークのタイムズスクエアから見た景色は、一生忘れません。

海外に行くのはお金もかかるし、不安も付きまといます。しかし、お金に変えられない素晴らしい経験ができるのもまた事実です。このような機会を与えていただけたこと、心から感謝いたします。

## 編集後記

中田未来 / 古谷美咲（3年）

最後までご覧頂き、有り難うございます。今年度ダンスレターの編集担当になりました、3年中田未来、古谷美咲です。

新型コロナウイルス感染症の蔓延により、例年に比べ学生はイレギュラーな状況に直面しつつありますが、このダンスレターを通してダンス学科の活動内容や学生たちの経験・がんばりをしっかりとお伝えできるよう、今後とも精一杯務めさせて頂きます。宜しくお願い致します。

## NEWS

**[ダンス・ワーク・セミナー]**

新型コロナウイルス感染症拡大防止のため中止

**[全国中学校・高等学校ダンスコンクール]**

新型コロナウイルス感染症拡大防止のため中止

**[3年生パフォーマンス]**

2020.11.14(土),15(日)＠本学総合体育館多目的ホール（予定）

**[第19回舞踊学専攻卒業公演]**

2021.1.19(火)＠府中の森芸術劇場　どりーむホール（予定）

発行
〒157-8565　東京都世田谷区北烏山8-19-1
日本女子体育大学　体育学部　ダンス学科

発行日：2020年7月23日